昭和46年2月1日第3種郵便物認可
平成15年11月1日発行（毎月1回1日発行）
俳句雑誌 沖 第31巻第11号

沖

俳句雑誌［おき］

11月号

沖 発行所

PDF 制作　俳誌の salon

脈搏

林　翔

鳥威しわれには朝寝威しとも

ふと触れて脈あり秋を生きてをり

はにかみはをとめにもあり初紅葉

さうかさうかと頷く吾よ道をしへ

老いの句

同人作品の選をしていて気付くことだが、古参同人に老いの歎きの句が散見されるのだ。「沖」も創刊してから三十三年を経たのだから無理もないとは思う。

しかし人間誰でも何時かは老いるのだ。老いを歎いて何になろう。

勿論その人その人によって健康状態も違う。家庭環境・社会環境も違う。歎かずにいられぬ境遇の人も多いことは承知しているが、「沖」に出す句を選ぶ時、もっと前向きな句で、もっといい句が無いかと、一考して頂きたいと思う。

私も八十九歳。老いの歎きの句がふっと浮かぶことはよくある。しかし頭には浮かんでも、それが歎き節だと気付いた時、手帖その他に書き留めないことにしているのだ。健忘の年齢である。書き留めなければ直ぐ忘れてしまう。それでよいのだ。時には書き留めずにはいられないよ

秋風をせめて旨しと渇きをり

紙こそは音立つるもの秋の句座

身に入むや介護の人の共窶(やつ)れ

亡き母の櫛を秋日にかざすかな

人待つや木の実落つるを待つや君

高橋英樹君

教へ子のTが画面に佳き夜長

うな佳句と自認することもある。それはそれで一応書き留めるのだが、「沖」その他に発表する作品の中には加えない。意識してそうしているのである。

うっかり加えてしまったものは無いかと、念の為一月号から見直したが、やはり無かった。むしろ、

この若き心を映せ冬鏡
若やぐよ恋恋恋の歌がるた
絨緞踏む八十路も末の身の軽き
若き日を食らふがごとしさくらんぼ

など、敢て若さに挑戦しているのであった。

林　翔

〈訂正〉
十月号「師の声のあまりに遠い迢空忌」は「遠し迢空忌」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。〈編集部〉

雁の空

能村 研三

秋澄めり心はすでに北を指す

反論の矛先を変へ菊膾

製本の紙に腰ある豊の秋

筆の穂を噛んでおろせり涼新た

自由に個性的に

俳人として困ることは、色紙や短冊に揮毫すること。もともと書が苦手なので、公民館講座などにも通ったことがあったが、中々誉めてもらえないので長続きしなかった。筆を持つ基本が出来ていないのかと、やや悲観的な思いにも駆られた。

しかし、否が応でも、書かなければならない。

だからといって書道を基本から学ぶ時間もないので、娘の高校の書道の先生にお手本を書いていただくなど即席のご指導をいただいている。

先生は、私の時間がないことを百も承知しているので、無謀なお願いを聞いてくださり、ある時はファックスでお手本を送ってくださることもある。以前教わったときは先ず基本からと、言われたりしたが、今は、自由に個性的に書けばよいと励ましてくださる。

その言葉に勇気を得て、俳人は書

秋瀑の壺に収まる水の列

真つ白な狼籍ぶりの葛の谷

舞阪・本興寺

葺き下ろす真屋丈長き雁の空

秋暑し河豚の餌つくる出刃捌き

今切口ことに素風を透かしゐて

波畳み海苔簀挿せる潮入湖

能村研三

家ではないので、自分流に下手でもよいから個性を出せばよいと思うようになった。

最近では、沖の句会などの賞に出す色紙、短冊の他に俳書展などへの揮毫の依頼もあり、あくまでも個性的に、自由にと自分に言い聞かせながら書いている。

書は齢と共に自然と枯れてくるものだと言われているが、果たしてそのようになれるのかと、少し不安を抱きながらも期待している。

今日もこれから高山の同人研修会用の短冊を書かなければならない。

蒼茫集

微弾力　上谷昌憲

保育所のプールにありつたけの声
貝風鈴正座を崩す潮どきか
黒真珠胸に真昼のいなびかり
議事堂へ一喝二喝はたた神
真裸の月は青林檎を照らす
宵闇や動く歩道の微弾力

魂迎へ　遠藤真砂明

磯波の秋立つさやぎまぎれなし
われにのみ見ゆる漁火魂迎へ
晴天の海鳴りが断つ秋愁ひ
渡舟着くまでの櫓音や秋の風
露の世にみごもりし娘の父がわれ
新稲架やまた登校の手が触れて

蟬の木　辻直美

秋海棠落ちて繋がる水の上
わが閨を赤子が占めて稲光
太陽の下僕となりて水を打つ
父母や夜業はいつも藁くさき
蝉の木の下で蟬より泣いてゐし
粟といふ字の粒々や豊の秋

盆東風　渡辺昭

水音に朝の来てゐる白露かな
老残の緋牡丹に風ほしいまま
盆東風の夜目にも走る兎波
風溜めて螢ぶくろの愁ひかな
火取虫老いても論は譲られず
読みつぎて琴をはづす虫しぐれ

潮鳴集

鶴首　秋葉稚治

鯉の斑の緋ごろもゆらと厄日過ぎ
不作田の泥掬うては抛りては
鶴首は秋思のかたち花挿すとも
砂にしるす網あと望の九十九里
さきざきは医師（くすし）にまかせ居待酒

あそび蔓　柴崎英子

涼新た風のかたちのあそび蔓
深大寺蕎麦に人待つ涼しさよ
ゆきかへり触つて通り含羞草
向日葵の空かがやけば海見たし
船出してみたき雲ありけふの月

卓袱台　清水公治

卓袱台があり裸の子つかまらず
板の間に大の字帰省浄土かな
水替へて出目金の鰭長くなる
秒針の動きにならひ蟬の羽化
ひとことに間のある一語夜の秋

応へ咲き　伊藤真代

ちちははの影いまも添ひつくつくし
月下美人待つ身に熱き応へ咲き
末の子の確と独立天高し
身ほとりの未整理のまま秋のこゑ
しつけ糸解くには老いし秋袷

見はるかす　宮内とし子

黒葡萄甘言ときに罪となり
ふくべ棚生家の記憶手繰りをり
竹伐つて竹の全長横たはる
秋蟬に体当りの死ありにけり
見はるかす潮目定かに鯊日和

沖作品

能村研三　選

夜目遠目山の端までそばの花　岩手　遠藤　とく
芋の露こぼれ上手にこぼれけり
遁世を決め蓑虫のもう揺れず
涼新た絣の藍の匂ふ夜
水落し身の心張り棒も外す
看とる日日色なき風に木綿干す　京都　子安　教子
白木槿嘘言はぬ瞳と思ひけり
櫛の歯のこぼれし不安秋夕焼
風呂敷と共に引揚げ終戦日
秋水に指が戸惑ふ無洗米
均衡をやぶる一打や夏燕　茨城　今瀬　一博
蟬の死のひつそりと悔いなかりけり
兜虫終の姿は破船めく
負け試合見終へし帰途の遠花火
饒舌もやうやう無口真菰刈る

群とんぼ画布に描き足す茜いろ　千葉　富川　明子
年金てふ余生の嵩よ秋桜
娘らまぶし端切れのやうな水着きて
疎抜菜むかし間引子てふたつき
夏果ての浜砂こぼれ旅鞄
舟修羅を観客席に花火待つ　谷口みちる
舟虫に方向音痴ゐるらしき
鰡飛んでとんで河口のうねりかな
まなうらに文字のひしめく虫の闇
印泥に油の浮きし厄日かな
将来を誓ふ白靴揃ひけり　長野　矢崎すみ子
青歯朶や歌舞伎を守る谷の村
透明な真昼に覚めて蟬の羽化
みな帰りたる送火の熱さかな
新涼や実生の枝に花つけて

赤とんぼ水棹は夕陽したたらせ　高橋あゆみ

浮雲の流れのはやき花野かな　兵庫　柴田　英彰

花すすき水の音より黄昏るる

秋夕焼湖一枚を遠に置き　市川市　岡本　崇

ヒロシマ忌磧の石を耳に当て

哲学者のやうな猫ゐる良夜かな　千葉　大沢美智子

火の星を見にゆく今宵酔ふまじく

熒惑のぐんぐん迫るななかまど　愛媛　渡部　義雄

月下美人夜半の帷を引き上げし

曾良眠る浦は北向き烏賊火燃ゆ　千葉　岡　米二

善戦てふ言葉やさしき夜の秋

近づきし火星の微熱葡萄熟れ

潮曇り男波の浚ふ花火跡

凌霄や身の幅ほどに蜑の路地

土用太郎安房の海境けぶらへり

明易や髪膚覚めゆく潮の鳴り

脳天に足の裏にと土用灸

蟬わあつと国破れたる日なりけり

百日紅雲はこの世のものならず

長き匙長く使ひてかき氷

大根蒔く母に戦後の未だ続く

持論押し通して悔いぬ冷し酒

パソコンのレシピ男の夏料理

父の声子より弾みぬ花野道

背で嘘をさらりと言うて胡瓜揉む　愛知　近藤　敏子

星の世の神話に浸る芒原

月の山ゆさ振り長き貨車過ぐる

花野風まとひ解けゆくわだかまり

くちびるを湿してよりの祭笛　福岡　吉田　昭二

揚花火にも序破急のありにけり

夕端居らしくしんみりしてをりし

目のとどく限りを祓ひ海開

新人賞予選句（十一月）

水落し身の心張り棒も外す　遠藤　とく

白木槿嘘言はぬ瞳と思ひけり　子安　教子

兜虫終の姿は破船めく　今瀬　一博

年金てふ余生の嵩よ秋桜　富川　明子

印泥に油の浮きし厄日かな　谷口みちる

みな帰りたる送火の熱さかな　矢崎すみ子

赤とんぼ水棹は夕陽したたらせ　高橋あゆみ

焚惑のぐんぐん迫るななかまど　柴田　英彰

善戦てふ言葉やさしき夜の秋　岡本　崇

明易や髪膚覚めゆく潮の鳴り　大沢美智子

沖作品選後句評

＊

能村研三

水落し身の心張り棒も外す　遠藤　とく

遠藤とくさんは、沖では古い方だが、盛岡からバスを乗り継いでかなり奥に入られるとか。岩手の句会に来る時も一日がかりで出て来られる。

掲出の句、やはり実際に農業を体で体験しなければ出てこない気持であろう。稲穂が成熟して垂れはじめると、畦の水口を切って水を落とす。山の棚田などの落し水は音を立てて畦畔を落ち、下の田溝を流れてゆく。この音を聞くのは丹精をこめて田仕事に取組んできた農家の人にとっては、収穫を確信する最も至福な時間でもある。水を落とすには堰板を外したり、つっかえ棒を外したりもするが、正にそんな仕種に加えて、胸の心張り棒も外れて安堵な時を迎える。

白木槿嘘言はぬ瞳と思ひけり　子安　教子

木槿の花は早朝に咲き、一日でしぼんで落ちてしまうことから、「槿花一日の栄」と言って、人の栄華のはかなさにたとえる。しかし一花の命は短くても、夏から中秋にかけて人知れず次々に咲き続ける花の姿には一種のけなげさも感じられる。底紅とも言われ、底に紅をぼかした美しさは、嘘を言わない人間の純真な瞳とも通じるものがあった。

兜虫終の姿は破船めく　今瀬　一博

兜虫と破船の斡旋がおもしろい。「めく」と言う直喩の手法を使っているが、ものに喩えるのにも余りにも常識的であれば陳腐におちいりやすいし、逆にかけ離れていれば一人よがりになってしまう。兜虫は生きているうちは黒茶色の光沢があり、いかめしい姿で風格をもっているが、終の姿も体の一部が朽ち果ててもその威厳を崩すことはない。兜虫から破船を想像した詩情に感心した。

年金てふ余生の嵩よ秋桜　富川　明子

高齢化が急速に進む現代、年金問題と余生の暮らし方は、当事者であれば切実な問題である。少子高齢化と言われて久しいが、高齢者を支える年金支払い者の数がどんどん減少する傾向にあり、余生を暮らすにも不安な材料ばかりだが、人生の残り時間で何が出来るか、何がやれるかを人々は模索している。

（以下略）